

ネパール仏教の死者儀礼

山 口 しのぶ

(東 洋 大 学)

は じ め に

ネパール、カトマンドゥ盆地に住むネワール人たちの間では、インド密教の伝統を色濃く残すネワール仏教が信仰されている。ネワール仏教においてはさまざまな儀礼が執り行われるが、人の死後数年間で行われるものに、「ピンダ」(piṇḍa) と呼ばれる団子状の供物を供える「ピンダ供養」(piṇḍapūjā) がある。本稿においては、ネワール仏教のピンダ供養の構造とその特色を述べるとともに、この供養を通じて見られるネワール仏教徒の死生観について考察していきたい。

1. ネワール仏教における死者儀礼のサイクル

カトマンドゥ盆地には、6世紀には仏教が広まっていたといわれるが、中世期(14世紀頃)、ヒンドゥー教徒である支配者の政策により、カースト制度を受け入れている。「ヴァジュラーチャールヤ」(vajrācārya) と「シャーキヤ」(śākya) という姓を持つネワール仏教の僧侶階級は、商人、農民などその他の仏教徒たちと檀家制度によって結び付けられており、僧侶たちは檀家の求めに応じて儀礼を行う。

Gellner (1993: 209) は、カトマンドゥ盆地パタン市のヴァジュラーチャールヤとシャーキャが行う死者儀礼のサイクルを述べている。それによれば、死者は死後1日経って荼毘に付される。7日目に死の穢れは取り除かれ、人々は家を浄化する。死後7日までの間に死者の魂は毎晩家に戻ると考えられ、彼らに対し食べ物が供えられる。7日目から45日目までは、死者の魂がさまよっていると考えられる。45日目に僧侶は死者儀礼を行い、その儀礼により、死者の霊は「ピトリ」(pitṛ) と呼ばれる祖霊となる。その後は死後6か月、1年目、2年目に儀礼が執り行われる。なお、この2年目の儀礼をおこなったのち、仏教徒たちは毎年16日間続けて祖霊への儀礼を行うとされる。

死者に対する儀礼には、以上に述べた以外に、年中行事の一環として行われるものもある。ネワール仏教徒にとって最も聖なる一か月であるグンラ一月の黒分第2日に、パタン市では「マタヤー」(ネワール語, Nw. matayā) と呼ばれる行事が行われる。マタヤーにおいては、仏教徒たちは灯明を手にして市内すべての仏教寺院と仏塔を巡拝するが、その一年間に家庭内で不幸があった場合、その家庭の男子が腰布一枚となり、裸足で一日中五体投地をしながら歩き通すという(田中・吉崎 1998: 213)。

またカトマンドゥ市在住のネワール仏教僧、ガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏によれば、ヴィクラム暦バードラバダ月黒分第4日には、カトマンドゥ市郊外の「ゴーカーナ」(gokarṇa) という聖地において、ネワール仏教徒たちは死去した父親の供養を行う。またヴァイシャーク月黒分第12日には、「マーターティールタ」(mātātirtha) と呼ばれる聖地で、死去した母親の供養を行うとのことである。

2. ネパール仏教のピンダ供養

このような死者または祖霊への儀礼として一般的に行われるのが、「ピンダ」と呼ばれる穀物などから作られた団子状の供物を捧げる儀礼である。そもそもピンダを供える儀礼は、古代インドのブラーフマニズムにその起源が見られる。紀元前2世紀から紀元後2世紀の間に成立したとされる『マヌ法典』第3章は、「ピンダ・アンヴァーハーリヤカ祖霊祭」（毎月の祖霊祭）について述べている。そこにおいては、祭主はまず人気の無い清潔な場所に、牛糞、クシャ草を敷いた座席を水で清めて、バラモンを坐らせた後、水、クシャ草、胡麻を火に供え、アグニ神、ソーマ神、ヤマ神らをもてなす。

その後、神々への供儀に用いられた供物の余りから3個の団子（ピンダ）を作って供えた後、それらの団子をバラモン僧に食べさせる。それから食べ物の容器を運んで祖霊を念じながら、その食べ物もバラモン僧に供する。この祖霊祭は偶数星宿の時期に行うと一切の願望を獲得し、また奇数星宿の時には優れた子孫を得るといわれる（渡瀬訳 1991:121）。このような祖霊祭は「シュラーツダ」（śrāddha）と呼ばれ、現代ヒンドゥイズムでも行われている。

現在ネパール仏教で行われるピンダ儀礼には、複数の種類がある。「リクワー・ピンダ」（Nw. likvāpiṇḍa）と呼ばれる儀礼は、死体を荼毘に付す場所で死体のそばで行われ、カラス、犬、餓鬼（preta）等にピンダを捧げる。ここでは死者を畜生道や餓鬼道に行かせないように、という目的でピンダが捧げられる。

ネパール仏教徒が家人の死後毎月、45日後、半年後、2年後に行われ、そ

の後毎年行われる儀礼は「世間のピンダ供養」(laukikaṇḍapūjā)と呼ばれる。ただしヴァジュラーチャールヤとシャーキャ、すなわち仏教僧の家庭では、死後2年間は「出世間のピンダ供養」(lokottaraṇḍapūjā)が行われる。出世間のピンダ供養は、世間のピンダ供養よりも密教的要素が強いといわれる。この供養を2年間行った後、ヴァジュラーチャールヤとシャーキャは「世間のピンダ供養」を毎年行う。なお、これらのピンダ供養は、「スラッド」(サンスクリット śrāddha のネワール語的発音)とも呼ばれる。次に2000年8月にネワール仏教僧の家庭で行われた世間のピンダ供養の次第について述べていこう。

3. ネワール仏教僧による「世間のピンダ供養」

筆者は2000年8月16日、1999年に死去したネワール仏教僧の自宅で、「世間のピンダ供養」を観察する機会を得た。⁽¹⁾先に述べたように、ヴァジュラーチャールヤの家庭では、原則的には死後2年間は「出世間のピンダ供養」が行われるべきとされるが、この時は世間のピンダ供養が行われた。この時のピンダ供養は、以下の次第で行われた。⁽²⁾

〈世間のピンダ供養の次第〉

1. 五種の牛の産物による浄化 (pañcagvayaśodhana)
2. ピンダへの供養
 - 2.1 世間のピンダ供養執行の宣言 (表白, saṃkalpa)
 - 2.2 祭主による師曼荼羅供養 (gurumaṇḍalapūjā)
 - 2.3 ピンダの盆への表白
 - 2.4 悪趣清浄仏塔等の供養

- 2.5 ピンダへの座の献供
 - 2.6 ピンダ供養
 - 2.7 祖霊とピンダの送り出し
 - 2.8 百字真言
3. 結びの行為：ピンダの盆を川に運ぶこと

供養の前に準備として、家人はごちそうを用意する。また儀礼の場（自宅）では、砂でできた祭壇が作られる⁽³⁾。また祭壇の脇には水、牛乳、ヨーグルト、ギーと蜂蜜の混ぜたもの、ネパーリー・ビール等を入れる容器が

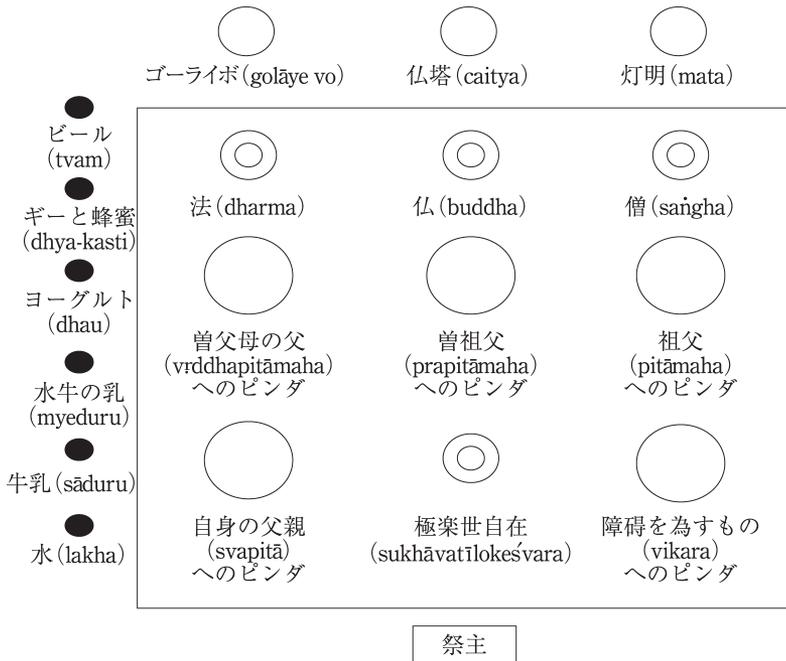


図1 「世間のピンダ供養」における供物の配置

置かれる（図1参照）。

ピンダへの供養に先立って、準備的儀礼である1. 五種の牛の産物による浄化 (pañcagavyaśodhana) が行われる。これは「シトゥ」(Nw. situ) と呼ばれる小さなホウキ状の植物で、牛乳，ヨーグルト，ギー（バター油），牛の尿，牛糞という5種の牛の産物を混ぜ合わせたものを儀礼に使用される道具にふりかけ，それらを浄化する行為である。

その後，中心的儀礼である2. ピンダへの供養が始まる。まず儀礼に参加するメンバーが，儀礼で供えられる花，線香，食物等が入った供養盆に右手で触れ，その際僧侶はピンダ供養執行の宣言（表白）を行う。この表白では，儀礼の日時，祭主の氏名等が述べられ，「祭主の父親である故人を地獄道や餓鬼道から解放し，極楽に住まわせ，最終的には無上正等覚を得させるため」という，このピンダ供養の目的が述べられる。

その後，2.2 祭主による師曼荼羅供養 (gurumaṇḍalapūjā) が行われる。師曼荼羅供養はネワール仏教儀礼において最も基本的な供養であり，ほとんどの儀礼の際最初に行われるものである。ここでは祭主は自身の前に描かれた小さな円（グルマンダラ）上に須弥山世界を確立し，その須弥山世界をネワール仏教僧たちの師（グル）と考えられる金剛薩埵に捧げる。ここで師曼荼羅供養は，その後の中心的行為であるピンダの献供のため，祭主がそれにふさわしい者となる，という役割を担っていると考えられる。

つづいて祭主は，故人の妹が持ってきたピンダの材料を入れた盆を手にとる。この時のピンダの材料は，大麦の粉，水，米，バナナ等であった。祭主はピンダの盆を両手で持ち，2.3 ピンダの盆への表白を行う。僧はここでも，儀礼の日時，祭主の氏名等を述べ，儀礼執行の宣言を行うが，その前に「オーム，世尊，一切悪趣清浄王へ，如来，阿羅漢，正等覚者へ敬礼する云々 (om namo bhagavate sarvadurgatipariśodhanarājaya

tathāgatāyārhatē samyagsambuddhāya)」という文言を唱える。これは『初会金剛頂経』第2章「降三世品」の釈タントラとされる、『悪趣清浄タントラ』 *Durgatipariśodhanatantra* に見られる真言と一致する。『悪趣清浄タントラ』はネパール仏教においてはポピュラーであり、葬式の際にも悪趣清浄マンダラが用いられる。

表白の後、祭主はピンダの材料をこね合わせ、四角いかたまりにする。それからクシャ草を用いて、縦四分割、横四分割の計十六分割する。そのかたまりの右端の一部取り、右手で丸めて仏塔の形にする。これは「悪趣清浄仏塔」(*durgatipariśodhanacaitya*) と呼ばれる。次に祭主は、僧侶の前にこの悪趣清浄仏塔を置き、僧は五仏四妃への敬礼文を唱え、「オーム、安立せる金剛に、スヴァーハー」という真言を唱える。

それから仏塔に花を供えた後、祭主は肩からかけた紐を左手で持ち、右手に「クシャ・プッティカー」(*kuśaputtikā*) と呼ばれる、クシャ草を十字に結んだ一種の依り代を持つ。ここで新たに「クシャ草の依り代への表白」が行われるが、これは、この儀礼の場に、仏・法・僧の三宝、および「極楽世自在」(*sukhāvātīlokeśvara*) と呼ばれる観音の一種を、クシャ草を依り代として呼び出す行為である。その後罪を浄化する真言が僧により唱えられ、仏塔、クシャ草の依り代に住すると考えられる三宝および極楽世自在に、花等で供養が行われる。

供養のあと、僧は悪趣清浄仏塔、三宝、極楽世自在のほか、金剛薩埵、火天アグニ、ガンジス河、太陽、月等を「目の前に現れさせる」(*sākṣi*) 文言を唱える。ここでは、祖霊に対してピンダを捧げる行為を証人として見せるために、これらの存在を呼び出すと考えられる。

その後、この儀礼の一番の中心である2.6ピンダ供養のための表白が行われる(写真1)。祭主は先に述べたピンダの材料に、さらにサイの干し肉を⁽⁴⁾



写真1 ピンダ供養のための表白

入れて、団子状にまとめた後、右手に肩からの紐を持ち、左手にピンダを持つ。この時僧は二種の表白文を唱える。

それらの表白文の第一は四種の祖霊、すなわち祭主の父親 (svapitā), 祖父 (pitāmaha), 曾祖父 (prapitāmaha), 曾祖父の父 (vrddhapatāmaha) の四種の霊に対してピンダを捧げるための表白文であり、第二は餓鬼など、障碍をなすもの (vikara) へピンダを捧げるための表白文である。

表白の後、僧が「オーム、世尊、一切悪趣清浄王へ、如来、阿羅漢、正等覚者へ敬礼する云々」という、先の「2.3 ピンダの盆への表白」の際にも唱えた悪趣清浄タントラの文言を唱えた後、「天界に赴いた某々なるもの⁽⁵⁾の一切の行為の障碍の浄化に、スヴァダー」という真言を唱える。その時祭主は、ピンダに供水 (闍伽水) を供える。その後祭主は、牛乳、ヨーグルト、バター油と蜂蜜、ビール、水、黄色い粉、花、食物、ヨーグルトと炊いた飯を混ぜた「ダウバジ」(Nw. daubaji) と呼ばれる供物、果物等を、次々とピンダに供える。ピンダに対して供養がなされたのち、家

族のメンバーが儀礼の場に再び集合する。ここではメンバー各自が手に米を持ち、僧は悪趣清浄マンダラの讃歌を唱える。僧が讃歌を一偈ずつ唱えるごとに、メンバーはピンダに米を投げ供える。

讃歌を唱えながら米を供えた後、祭主は水、牛乳、ギーなどを混ぜ合わせ、それを供え水（闕伽水）としてピンダにあらためて供える。その間僧は、「いかなる衆生であろうとも、私の真言において確立されるべきである。（中略）天界に赴いた某々なるものが、極楽世界におもむかんことを、云々」という文言を唱えて、祖霊たちが極楽に行くことを願う。祭主と僧両者は右回りに3回、左回りに3回闕伽水の容器を回しながら、ピンダに水を注ぐ。

供え水の献供の後、ピンダにご馳走や果物、ビール、布施等が供えられ、金剛薩埵の百字真言をもって、ピンダへの供養は終了する。このピンダ供養のテキストでは、その後「ジョーギー」(jogī)あるいは「カーパーリー」(kāpālī)と呼ばれる低カーストに属する仏教徒を呼び、ご馳走を供する行為が述べられる。ジョーギーは、葬儀の際楽器を演奏するなど、死者儀礼に深くかかわるカーストである。ここではこのジョーギーに食事を供する行為は省略された。

ピンダへの一連の供養が終了した後、祖霊とピンダを送り出すための一連の行為がなされる。祭主はピンダを盆に戻し、盆を先にピンダが置かれていた祭壇に置く。つづいてピンダの上に「虚空の花環」(ākāśamālā)と呼ばれる糸を置き、僧はこの花環を捧げる真言を唱える。その後「ナスワー」(Nw. nasvā)と呼ばれる、祖霊に捧げるための特別な香と灯明などが供えられ、金剛薩埵の百字真言でピンダ供養は終了する。

その後、祭主は「ジャープ」(jyāpu)と呼ばれる農民カーストの仏教徒にピンダの入った盆を渡す。ジャープはピンダの盆を川岸に持っていく。ジ

ャープがピンダを川岸に置いて祭主の家に帰ってきたとき、祭主は法螺貝の水をジャープの手に振り掛ける。

4. ピンダ儀礼の特色とネワール仏教徒の死生観、他界観

以上、比較的複雑な構造を有する世間のピンダ供養のプロセスを述べてきた。Gellner も指摘するとおり、筆者が観察したネワール仏教徒のピンダ供養は、ヒンドゥー教徒の祖霊への儀礼であるスラッダ・プジャの形式を借用していると思われる。実際2009年8月20日に聖地ゴールナでは、仏教徒およびヒンドゥー教徒両者によりピンダ供養が行われていたが、一見して両者の区別をつけることは困難なほど両者は類似していた。またピンダが捧げられる対象も、「ピター」「ピターマハ」「プラピターマハ」という呼称で呼ばれるが、これも『マヌ法典』など、ブラーフマニズムのダルマシャーストラ文献にすでに見られる呼称である。

しかしながら、この儀礼を詳しく見ると、諸々の行為や真言の中にヒンドゥーとは区別されるべき仏教的要素を多分に含んでいることがわかる。最初の表白の部分では、この供養の目的が述べられるが、その目的とは、(1)死者を地獄から救うこと、(2)死者を餓鬼道から解放すること、(3)死者が極楽世界に生まれ変わること、(4)死者が無上正等覚という果を得ることの4点であった。

また全体のプロセスにおいて、まず祭主が師曼荼羅供養により聖化され、その後悪趣清浄仏塔を儀礼の場に確立し、三宝や極楽世自在、金剛薩埵等と呼び出し礼拝する。その後ピンダが祖霊に捧げ、死者の霊が極楽に生まれるように願うという、きわめて仏教的な救済の要素を多分に含んでいるのである。以上のうち、特に仏塔を作製するという行為は、『悪趣清浄タ

ントラ』にも述べられている。『悪趣清浄タントラ』においては、罪を犯した人物を、地獄道、餓鬼、畜生道から解放する手段としての儀礼の中で、仏塔が作製される場面が述べられる。⁽⁶⁾以上のことより、本稿で述べたピンダを用いての祖霊への供養は、外形はヒンドゥーのピンダ儀礼を借用しながらも、内部には意識的に多くの仏教的要素を挿入して、仏教儀礼としての特色を示している。

また儀礼で死者に供されるご馳走を、ジョーギーという低カーストの仏教徒に供する行為や、仏教徒の農民カーストであるジャープにピンダを運ばせるという点は、ヒンドゥーとは区別されるべき、仏教徒コミュニティーの縦割りの関係を確認するとともに、そのコミュニティーの繋がりを強化する、という役割を持っていると考えられる。

以上のように、ネワール仏教徒によるピンダ供養は、輪廻の思想を基盤とする死者の救済（すなわち、よりよい来世に行かせること、あるいは極楽に行かせること）を目指している。一方、ピンダ供養の最後において、祖霊が住すると考えられるピンダの入った盆は川岸に置かれる。これについて、仏教僧ガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャルヤ氏は、「川は死者の霊の住処であるから」と説明された。これに従えば、死者の霊は輪廻の世界に漂う存在であると同時に、川に住する存在という、いわば2つの次元で存在することになってしまう。しかしながら、このような異なる死生観、他界観が共存するという現象は日本にも見られるものである。ネワール仏教徒にとっても、この2つの死生観が矛盾なく共存し、ピンダ供養の中に、両者の死生観を含ませて儀礼を行っていると思われる。

ところで『マヌ法典』などにおいて、祖霊にピンダを捧げる行為は一切の願望を獲得したり、優れた子孫を得るためとされ、その際祖霊自身がそれらの効果をもたらす力を有していると考えられているが、ネワール仏教

儀礼の場合、テキストにはそのような効果をピンダ儀礼がもたらすとは述べられていない。仏教徒たちは祖霊を救済するために供養を行うが、もし祖霊の救済のみが供養の目的であったら、祖霊にピンダを捧げる行為がそれほど重要な意味を持たなくなってくる。ネワール仏教徒たちがピンダを供える儀礼の背景には、供物を捧げられる祖霊自身が、ピンダ供養を行う人々に何らかの利益をもたらす力を持つという観念があるのではないだろうか。この点に関しては、今後の考察の課題としたい。

註

- (1) 以下に述べるピンダ供養は1999年に死去されたネワール仏教僧 Ratnakaji Vajrācārya 氏の自宅で行われた。祭主は長男の Sarvaggya Ratna 氏、僧はネワール仏教寺院トゥン・チェン・バハ (Tuṃ chem Baha, あるいは Tutakṣaṃvihāra) に属する Prem Ratna Vajrācārya 氏であった。この家庭の次男 Gautam Ratna 氏によれば、Prem Ratna 氏は親戚筋に当たり、またこの家庭が所属する寺院 Mantrasiddhi Mahāvihāra に関係する人物である。
- (2) その際サンスクリットとネワール語で記された以下のテキストが使用された。Phanindraratna Vajracharya ed. *Vajrayāna Pūjavidhi*, Kathmandu.
- (3) ガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏によれば、祖霊への儀礼は川のほとりで行われるのが望ましく、ここで砂の祭壇を作るのは儀礼の場を川のほとりに見立てているとのことである。
- (4) ガウタム・ラトナ氏によれば、ネワール仏教において、サイの肉は祖霊と関係すると考えられているとのことである。また『マヌ法典』3.272には「(前略) 犀あるいは赤山羊肉、蜂蜜およびムニのすべての食べ物永遠に効果を持つ (= 永遠に祖霊が満足する)」とある。(渡瀬訳 1991: 120)
- (5) ガウタム・ラトナ氏によれば、ピンダを祖霊に捧げる際には、「スヴァーハー」の語は使用せず、「スヴァダー」(svadhā) を使用するとのことである。『マヌ法典』3.252には「『スヴァダー』の語は祖霊に関するいっさいの祭儀における最高の祝詞だからである」と言われる(渡瀬訳 1991: 117-118)。
- (6) 『悪趣清浄タントラ』では、「灰、故人の骨、香水、五種の牛の産物 (pañcagavya) などを、浄化のための真言を10万回唱えて固まりにし、樟脳や塗

香や土と合わせ、尊像か仏塔を作るべきである」(bhasmāny asthirajāṃsi ca gandhodakapañcagavyasahitāni śodhanamantreṇa lakṣaṃ japtvā piṇḍikṛtya karpūragandhamṛdbhir miśrikṛtya pratimaṃ caityadevatām vā kuryāt) とされる (Skorupski 1983 : 248)。

参考文献

- 田中公明・吉崎一美 『ネパール仏教』 春秋社, 1998年
山口しのぶ 『ネパール密教儀礼の研究』 山喜房佛書林, 2005年
渡瀬信之 (訳) 『マヌ法典』 中公文庫, 1991年
Gellner, David N. *Monk, Householder and Tantric Priest*, Foundation Books (first ed. Cambridge University Press), New Delhi, 1993.
Kane, P. V. *History of Dharmaśāstra*, Vol. 4, Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune, 1973.
Phanīndraratna Vajracharya *Vajrayāna Pūjāvidhi*, Kathmandu, 出版年不明
Ratnakajee Vajracharya ed. *Kalaśārcanaṇḍīpūjāvidhi*, Yogāmbara Prakashan, Kathmandu, 1994.
Skorupski, Tadeusz *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1983.

